



雪国の春に鳥と出会う、  
レンジャク



良一

## 雪国の春に鳥と出会う、レンジャク

とき：昭和二十一年早春（二月末日頃）

内容：良一の体験記

場所：疎開先・母の実家

鳥名：ヒレンジャク、キレンジャク

（レンジャク科）

ムクドリ大、山地や低地の林、庭園などに冬鳥として飛来。尾の先端が赤色と黄色。

ヒレンジャクはキレンジャクより体が少し小さい。

昨日降っていた雪は、今朝は止んで、太陽がギラギラと輝いている。すがすがしい朝だ。

土間のダルマストーブに手をかざしながら籠から大き目の青のデリシャスを掴んでかぶりつく。たった今、朝飯、だったと云うに、何と食欲の旺盛なこと、ダルマストーブの中の薪は赤々と燃え、顔が熱い。

実家は天井が高いと云うに土間は温室の様で、遂に腰から錨が降り、じっと焔を見ていた。

重い錨を巻き上げて、美しい雪の中を散策することにした。

外気は凜として身がしまる。

ここ青森県南津軽郡清水村（今は郡名が変わっている）では毎年二メートル位の大雪で、この年も毎日雪、雪、然し二月の末か三月初旬ぐらいから天気の良い日もあったりして、日差しが春めいて心が弾む。雪が降らないというだけで、ただ嬉しいのだ。リンゴ畠の木立は延々と続き、雪道を歩くサクサク音も春らしく心地良い。

鳶が餌を探して輪を描いて舞っている。

カラスが一羽飛んでいった。

風は冷たい。

太陽の日差しはまぶしいが、光は柔らかで優しい。

どこからか雪解け水のほかは何も聞こえない静けさ。気が付けば畠の入り口近く、水路に豊かな水は滔々と流れ、水路の土手に美しい雪解け水の中で露の塔が青々と力強く春だよと言っている。「春だなー」と思う。

どこからか「チリチリ、チリチリ」と不思議な声。

キョロキョロと周囲を見回し、声の主を捜した。

「ヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイ」と小笛を吹いているかにも聞こえる。ふと頭上を仰ぎ見た、鳥だ、リンゴの梢や、数本の木々にリンゴを百個程、鈴なりになったかに見えた。顔つきは歌舞伎役者の隈取りのようで、冠羽がピンと立ち、つやつや光る羽、又、尾羽は、赤と黄の色で鮮

やかに輝いている。

「ヒレンジャク」と「キレンジャク」。

思わず「あっ！」と声を出してしまいそうになり、息を呑んだ。

それは「レンジャク」の大群である。私はその場に釘付けになった。

私と「レンジャク」の大群の距離は十二、三メートルくらいの間隔、「チリチリ、チリチリ」と鈴を振る、又笛を吹く「ヒィーヒィヒィ」と不思議な声は続き、又互いに啼きあうから続く。夢のような別世界に自分がいる。時間にして七、八分位は我を忘れて立ち尽くし、それはそれは長く感じた。

やがて、レンジャクの群れは音もなく飛び去ったものの、暫く私はその場から動くことができなかった。心残りではあったが、なぜか満たされた豊かな幸せを感じていた。

雪の冷たさは、ゴム長靴から足に伝わり血の気をなくしていたが、ほっと息をついて現実の世界に戻った。

現在、八十三歳の脳裡には、今も折に触れ当時の十九歳頃の情景がありありと蘇る。

私は心の中に永遠に変わることのない“ふるさと”の情景が今も生きているのだと確信した。